

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 研究主題、研究の方向性に対する教師の意識の統一

研究の当初は研究主題に対する各教員の認識の差が大きく理解も浅かった。各種の調査結果から本校の生徒の学力の実態を明らかにし、本校の生徒にとっての基礎・基本とは何か、各教科における読解力、思考力、判断力、表現力をどのような力と解釈し、定義するかを検討し、研究主題の目指す方向をまとめることができた。

(2) 授業改善を図るための教師の意識の向上

授業改善も学業指導の充実も最終的には教員一人一人の毎日の授業や生徒指導の工夫・改善による積み重ねから成り立つものである。本研究において、教員全員が研究主題を意識し、教科の特性や様々な授業形態における指導方法を考えながら、きめ細かな年間指導計画の作成、授業における実践と検証、スパンごとの評価、教育相談によるインフォームドコンセント等にかかわることで授業改善の意識を向上することができた。

(3) 年間指導計画の内容、方法の工夫

全教科で研究主題を考慮した年間指導計画を、学習のレディネスとの関連、読解力・思考力・判断力・表現力との関係、支援を必要とする生徒への手だて、基礎コース・標準・発展コースとの違いなどについて、教科の特性や教科ごとの研究主題を考慮しつつ統一した形式で作成することができた。

(4) 通知表の工夫・改善

1学期と2学期の中間に5教科（国語・数学・英語・理科・社会）の観点別評価を生徒並びに保護者に通知することは、インフォームドコンセントの考えに基づいた学習面談と連動して、今度の学習への意欲を高めるのに効果があった。

ポートフォリオ形式にしたことにより、評価・評定だけでなく定期テストの結果等もファイルすることができるようになった。保護者にとっても、年間を通した学習の様子を多角的に見ることができるようになり、子どもへの家庭学習への取り組みを促しやすくなった。

(5) 検証授業、研究授業による実践

各教科において、読解力・判断力・思考力・表現力の育成や、基礎・標準発展コース等を意識した授業改善の試みは、検証授業・公開授業・研究授業などを通して実践されてきた。実践を行ったことで、さらに教員一人一人の研究に対する意識を深めることができた。

(6) 学習相談の活用

今年度はインフォームドコンセントの考えに沿った取り組みとして、1学期及び2学期の途中に1回ずつ及び長期休業中に学習相談期間を設定した。夏季休業中はクラス全員を対象としたものであったが、学期途中の学習相談は、年間行事の中に組み入れたことにより、日数・時間・対象となる生徒の数は絞る必要はあったが、計画的に実施することができた。

(7) 生活と学習のサブノートの充実

レディネス教育の充実、家庭学習の定着、よりよい生活習慣の定着、家庭との連携、生徒理解と教員との交流の手立て等を目的として始めた生活と学習のサブノートは、アン

ケートの結果から約7割の生徒には、おおむね毎日の習慣として定着させることができた。生徒理解の資料としてや、家庭での生徒の姿や保護者の考えを知るにはとても役立った。

2 今後の課題

(1) 年間指導計画の内容、方法の工夫

全教科で研究主題を考慮した年間指導計画を、統一した形式で作成したが、今後学習指導要領の完全実施にむけ、さらに工夫・改善する必要がある。

(2) 検証授業、研究授業による実践とデータの収集、分析、考察をより推進する

各教科での授業改善の試みは、検証授業・公開授業・研究授業などを通して実践されてきた。今後はさらにきめ細かく日々の授業の中で、読解力・判断力・思考力・表現力の育成を意識した部分はどこであるか、また、基礎と標準・発展コースをより明確にしていく必要がある。その毎日の積み重ねの結果はどうであるのか、データを収集し分析、検証していかなければならない。

(3) 評価方法の工夫

各スパンごとの評価の内容やポートフォリオ形式での通知表のメリット、デメリットをよく分析し改良を加えていきたい。

(4) 教育相談の更なる活用

今年度は長期休業中を含め5回の教育相談を設定することができたが、5スパンの後については時間の設定ができず、さらに面談対象者を少人数に絞り込むことが必要になっている。授業時数を確保しつつ、6回の教育相談を設定し時間の保障をすることで実りあるものとしたい。

教員にとっては、資料の準備、家庭との時間調整、実際の面談と労力を要する仕事ではあるが、次のスパンでの学習に向かって生徒が意欲的になるように、今後もていねいなインフォームドコンセントの考えに基づいた教育相談を心がける必要がある。

「学習相談カルテ」については、今年度から実施したものでありその効果についてはまだ明らかになっていない。今後の活用を図っていくとともに、その有効性について分析・検証し、その結果をもとに工夫・改良していく必要がある。

(5) 学習指導を支える生徒指導全般に対する取り組みの強化

基礎・基本の確かな定着と向上を目指し、充実した学習活動を推進するには、その土台ともなる学校生活の充実が不可欠である。生徒たちに様々な豊かな体験や、活動の場を与えるためにもより安全で落ち着いた学校の環境づくりに努めていく必要がある。また、教員の共通理解のもと、確かな学級経営、学年経営や充実した道徳指導を目指し、きめ細かな生徒指導に努めていかなければいけない。

(6) 生活と学習のサプリノートの充実

生活と学習のサプリノートは、おおむね毎日の習慣として定着させることができ、生徒理解の資料としてや、家庭での生徒の姿や保護者の考えを知るためのツールとしてはとても役立った。しかしまだ、面倒だからという理由で取り組む意欲の低い生徒や、保護者との連絡がうまく機能していない生徒などがいることも事実である。また記述の内容や形式、提出方法、ノート自体の形状など改善を図らなければならない点が多くある。

(7) 保護者、地域との連携の強化

本校生徒の家庭や地域の実態として、教育や学校に対する関心は高いものがある。しか

し生徒の約4割は基礎学力不足で学力の二極化傾向が顕著である。研究を推進し学習活動、生徒指導の充実を図ることは、この二極化傾向の解消や学校教育への信頼回復となり家庭や地域への大きなアピールとなる。また、保護者の研究に対する理解、協力が得られなければ効果を望めない取り組みも多くある。普段の学習活動をはじめ、学校行事、生徒会活動、部活動などさまざまな教育活動を積極的に家庭や地域に発信しアピールすることで関心を高め、理解や協力をさらに得られるよう努めていく。

「凛として、確かな学びで大きく伸びる日本橋 心かよわせ夢かなう学校」というスローガンのもと、この研究への取り組みが目標とする学校の姿としてとらえられるように研究実践を継続して推進していく。